

イタリアパルマの少年サッカー

【ベースボールマガジン社】発行月刊誌サッカークリニック
2002年7月号掲載記事
天野泰男著

2002年イタリアスプリングキャンプ「第1回ACパルマ国際サッカースクール」

イタリア北部の港町ジェノバ市街にバスが入り込むと、少々「危険な香り」が漂ってきた。港町はいろんな人が行き交う。バスの運転手は案の定、道に迷ったようである。日本だと乗客は全く心配することなく時間通りに目的地に着くものだが、イタリアの運転手は目的地をよく調べない。大型バスにもかかわらず道端に駐車して窓から顔を出す。「サッカーグラウンドはどこにあるんだ!？」

声をかけられた人は「知らないねー」なんて絶対言わない。ジェノバの人に限らずイタリア人は必ず親切に答えてくれる。しかしこれを信じるのはまだ早い。あと2人には聞く必要がある。3人に聞いたなら、その共通点を探そう。それが正しい答えだから。

あたりまえの事だが、国によっていろんな事が違って来る。言葉が違う、通貨が違う、習慣が違う、考え方が違う。それらを全てひっくるめて「文化の違い」と称するが、同じルールのサッカーが国や地方によって様変わりすることを理解するにはやはりその土地に向く事が一番である。

なぜイタリアサッカーは強いのか?そんな素朴な疑問を追いつづけて5年。今回はパルマに答えを求めた。ACパルマは全面的に「第1回ACパルマ国際サッカースクール」としてわれわれを歓迎してくれた。中田英寿という偉大な選手と同じ民族の血を受け継ぐ若者達を。パルマとの出会い

フレスカが1996年にイタリアと交流を開始して6年が過ぎた。中・高校生年代によるキャンプを今回で5回目、指導者研修会を6回行ってきた。この間、ローマ、ラツィオ、インテル、ペルージャ、ベネツィアなどセリエA強豪チームを訪問し少年育成の比較や指導者間の意見交換など活発に行った。また、イタリアサッカー協会少年育成部との交流で協会としての少年育成指針も研究した。なぜ今回パルマを選んだかということ、もちろん日本サッカー界の先駆者「中田英寿」選手が所属するチームという事は当然ながら、パルマが考える世界に広げるスクール展開や選手育成の方向性が合致したからである。

「第1回ACパルマ国際サッカースクール」と名づけられた今回のステージは、ACパルマの全面的なバックアップのもとフレスカ神戸・伊川谷・テルツァ・三田、リベルタ明石(兵庫)、三井千葉、ウイングス習志野(千葉)、シーガル(香川)、ベルディ相模原(神奈川)、MUNE広島(広島)、操南(岡山)、タイケン(熊本)、大崎FC(鹿児島)、沖縄から参加した154名とスタッフ12名によって行われた。単独チームで大会や試合に参加した者もいれば、日本各地のチームから4、5人の少人数で参加し合同チームを作ったものもあった。普通、海外でプレーするチャンスは、選抜や代表といったレベルの高い選手でないとなかなかないものであるが、今回のような試みはどんなレベルの選手でもイタリアの選手と直接試合ができ、コーチも日頃指導している選手がどれだけ戦えるか明確に分かるという点で大変貴重な経験だったと思う。ACパルマのトップチームがすぐ横で練習する美しい芝生でACパルマのコーチの指導を受けるチャンスは一生の中でもそんな恵まれるものではない。

全体の日程は午前中が AC パルマ少年部門コーチによる練習、午後が近隣で行われた大会参加または練習試合。セリエ A「ミラン-パルマ」をサンシーロで観戦。パルマの本拠地「エンニオ・タルディーニ」スタジアムの見学とショップ「エンポリウム」での買い物。パルマ市内観光など盛りだくさんのスケジュールをこなした。

日程の都合で全てのチームが参加できたわけではないが、復活祭の休日を利用して行われた「パビア(ミラノから南へ25km)」、「マラネッロ(パルマから東へ50km)」、「ジェノバ」の3つの大会に6チームが参加した。これらのチームは、ブーイングや爆竹、不可解な判定や厳しい声援などアウェーの洗礼を受け、まるで代表チームのような”怖い体験?”もできた。選手達は国際試合がどんなものであるかを文字通り肌で感じ取ったに違いない。ジェノバでの大会の事である。一つの日本のチームが大会主催のホームチームに勝ってしまった。スタンド前列で見ていたわれわれの背後は、そのイタリアチームの保護者が陣取っている。はじめは、息子のプレーに熱心に声援を送っていたが、状況が不利になるにつれて声援は罵声に変わり「今日は家に入れなからねー」なんて怒鳴っている。恐る恐る後を見ると、本当に殺気だった表情のママたちが目に飛び込んだ。終了のホイッスルがなって「やったー！日本チーム！」とは口が裂けても言えない雰囲気が漂っていた。でもすぐに、日本チームにエールを送る姿を見てちょっと安心した。たぶん今夜は一家で食事をしながら、その息子はママから「日本なんかを負けてだらしないねー」なんて言われているに違いない。サッカーを嫌いな人もいるに違いないが、イタリアではサッカーが生活の潤滑油になっているような気がした。

アリゴ・サッキを迎え入れた理由

1994年アメリカワールドカップイタリア代表監督のアリゴ・サッキ氏は1985年、当時セリエCのACパルマをセリエBに引き上げた。その後この手腕を買われACミランの監督に抜擢、「ゾーンプレスサッカー」でミランとサッキの名前を全世界に知らしめた。パルマは昨年12月に「監督」という立場ではなく、パルマを世界的なチームに発展させる為「テクニカルディレクター」として再び迎え入れたのである。地元パルマファンにとってサッキ氏はチームをセリエBに昇格させた革命人であり崇拜されるカリスマ性を持った人物である。もちろん彼の実績や名声は今後ACパルマを世界的に有数なチームへとランクアップさせるであろう。実際に彼の「顔」によって有望な選手を移籍させる事が可能になった。また、彼は少年チームの指導経験も豊富な事からこの年代の強化にも力を入れるようである。

少年育成部総括責任者のブルーノ氏がこれからのパルマの少年育成方針について語ってくれた。

「10歳から18歳までの選手強化部門の目的は、

- 1、セリエAのほかのチームより強いチームを作ること。
- 2、トップチームに優れた選手を輩出すること。

の二つである。これまでのACパルマはトップチームの強化を焦るあまりに、これらの年代の強化をおろそかにしてしまった。これからは、この年代の育成に時間をかけてじっくり選

手を育てていきたい。もちろんこれはサッキ氏の考えによるものである。ただ、彼が就任して間もないので現在その方策を検討中で、2002年度から具体的に実行されるだろう。例えば現在 AC パルマが直接強化している育成チームは一つだけだが、全国に将来は 10ヶ所ぐらい作り資金の提供はもちろん、AC パルマの選手育成システムに沿って選手の発掘、強化を行っていきたい。そして、そういった選手を他のチームに売って利益を得るのではなく、AC パルマのユニホームを着て活躍して欲しいと願っている。これ以外に普及部門にあたるサッカースクールを約 300 箇所で開催している。このスクールは AC パルマの指導方針は伝達しているが、選手育成を目的とはしていないので強化というよりも AC パルマというチームに親しみを持たせる意味合いが強い。また、親会社が乳製品を扱う企業なので、商品のマーケティングという役割も持っている。」

ブルーノ氏は今回の AC パルマ主催による国際サッカースクールを全てオーガナイズし、154 名全 9 チームの日程調整を行ってくれた。AC パルマコーチによるトレーニングは、計画段階から洗練されたものであり後の指導者講習会でもトレーニングの説明を充分に行ってくれた。

コレッキオというトップチームが練習する同じ敷地で練習ができたため、スター選手との「ニアミス」も経験した。中田、カンナバーロ、ディバイオ、センシーニなど各選手などとの触れ合いは、若き日本の若者にとって一生忘れられないものだったろう。

現地日本人コーディネーターで、通訳をはじめブルーノ氏とともにオーガナイズに協力した小山浩太郎氏は、「もちろん AC パルマは日本に中田のような優秀な選手が他にもいるに違いないと思っています。これは、日本人選手がヨーロッパや南米の選手と同じレベルで語られていることになります。現に今回このステージに参加した選手はみんなイタリア選手より技術的に優れており、十分可能性を見出せる事ができました。現地のテレビや新聞に取り上げられた事はもちろん、AC パルマホームページで連日このイベントを紹介する熱の入れようは、AC パルマが日本に進出する事も十分考えられるでしょうね」と密かに語った。

AC パルマのゼネラルマネージャーのルカ・バラルディ氏はインタビューで今回のステージの重要性について次のように語った。「私達にとって今回の企画は大変重要な事です。150 人を超える日本の少年達がやってきてこの様なキャンプに協力する事はとても興味深く、そして刺激的です。少年達は様々なトーナメントに参加しながらイタリアを廻っています。彼等はとても行儀が良いですよ。彼等は試合に勝ちイタリアチームを苦戦させています。これは日本のサッカーレベルが上がってきている証拠にもなります。ぜひみんながこのキャンプを通じ成長してほしいです。そう！君達の先輩中田の様に！中田は 40 年以來ヨーロッパで勝つ事が出来なかった日本代表チームにポーランド戦で勝利をもたらしたのです」

トレーニング内容とプラン

「AC パルマ国際サッカースクール」のトレーニングを担当したのは、10 年以上パルマ

の少年育成部門のコーチを務めた経験のあるパオロ氏である。彼が今回考えた7回のトレーニングは、決して思いつきではない根拠のあるものだった。

コーチは練習を考える時に様々な要素を考慮し計画を立てる。例えばシュートを改善したいとか、守備力を向上させたいとか、個人スキルを伸ばしてやりたいとか漠然なことかもしれないし、具体的なことかもしれない。いずれにしても、計画を立てる時にはその対象者、つまり選手のことはある程度知っている事が普通である。

ところが、今回は日本の選手がどんなレベルにあって、また、何ができて何ができないかが事前にわからないという問題があった。時々私も「何か練習をして下さいよ」なんて頼まれる事があるが、これが一番悩む事なのである。何かを向上させて欲しいとかリクエストがあれば、それに答えるトレーニングは用意できるが「何でもよいからやってくれ」というのは、逆に何をやってよいかわからないので困るわけである。まさにパオロ氏はこの問題に直面し、さらに150人という人数も頭を悩ます事になったに違いない。

まず、彼は日本の情報として、過去何度か見た日本人チームを思い出し「日本人は技術的に優れているが戦術的に誤りが多い」との印象を持った。これは、これまでも多くのイタリア人コーチが口にした言葉と全く同じである。代表レベルから青少年レベルまでシュートの決定力不足と戦術レベルの低さはおそらく日本がもっとも世界と差があるところだと思う。例えば野球を例に取ってみよう。日本人はイタリア人より野球を知っているだろう。私は野球の専門家ではないがどんな所で送りバントをすれば有利か、いつ敬遠をして塁を埋めダブルプレーを狙うかだいたい分かっている。これは、野球の戦術の一部である。しかしこの知識がない人は、せっかく得点するチャンスがあっても大ぶりして三振する、ワンアウトを取る事ができて1点を入れられるというミスをしてしまう。サッカーは、野球のような静的な場面は少ないが、そういった定石がきつとたくさんあるに違いない。おそらくイタリア人から見て日本人は、野球で例えるなら「大ぶり」をしているのだ。コーチの資質が違うということではなく、国や地域のサッカーの成熟度がこれを高めていて、日本は歴史が浅いといわざるを得ない。

話は少しそれてしまったが、パオロ氏は日本人に対して技術的なものよりは戦術を教えるよう考えた。まずは、攻撃と守備に数的優位が生じない2対2をやらせて、1(攻撃)対2(守備)、3対2など数的優位、不利の攻守の戦術に発展させた。さらに3対3、4対3、3対4に発展させて複雑な状況へ進めようと考えた。この発展の中で技術的な問題で次のセクションに進めない場合は、全てを消化することは難しいだろうという予測も立てていた。

パオロ氏は練習を進める中で、特に攻撃において戦術ミスを指摘する事が多く「どうしてそんなパスをするのか」「なぜもっと動かないんだ」という不満があったようだ。「イタリア人ならそんなミスを犯さないはずなのに」という苛立ちは表情から見受けられた。攻撃を理論立てて指導する事は難しいことだが、コーチの私たちがもっともっと勉強しなければならぬと感じた。

ACパルマのコーチは、練習中にあまり大声で指示をしたりゲームフリーズしたりはしな

い。自分のチームではないといったある種の遠慮はあるにしても、選手を観察して何をやるうとしているかを洞察する事を大切にしている。選手の判断を向上させる為に何度も失敗を経験させながら自分で気づくまで待つ手法は、イタリアサッカー協会の指導方針と完璧に合致している。

日本人と何が違うのか？

イタリアのサッカーと日本のサッカーはいったい何が違うのか。その前に、イタリアと日本のレベル差はどれくらいなのかを考えなければならない。試合での勝敗だけで語るならば、昨年行われた日本代表とイタリア代表の試合は引き分けだった。だから「同じレベルである」と言えそうだが、サッカーを知っている人ならそうは言えないという事くらい分かっている。ワールドカップの成績がその国のレベルと考えるならば、前回のフランス大会ではイタリアはベスト8、日本は1次リーグ敗退。今回もしも日本がイタリアより成績が上回るならば、イタリアより優れているということが言えるかもしれない。日本は近年本当に実力をつけている。世界のトップクラスにあと少しという所まで来ているとって過言ではない。ヨーロッパはほとんどの国へ空路2時間程度で移動でき、お互いの競争が激しく、その中で「もまれてる」環境だ。残念ながら、アジアはレベルが低く強国と戦うのにも地理的なハンディがある。イタリアでは、運動能力の高い男子は絶対にサッカーをしているが、日本は他の種目をやっているかもしれない。そういうことを考えると、日本の努力は絶賛に値すると思う。しかし、常に世界の頂点を目指すならば世界の強国を見習わなければならないであろう。

13 16歳レベルでは、日本人は体格的に劣っている。これは民族的なものであって、どうしようもない問題である。ただ、成人になってもはるかに劣っているとは言えないし、体力的なことはトレーニングで改善される為そんなに困難な問題ではないといえる。技術的には日本人の方が優れている。やわらかいドリブルや、トリッキーなフェイントはイタリア人に真似できないくらい上手い。しかし、戦術的な判断は断然イタリア人のほうが優れている。これは、よく観察しないとなかなか分からない事であるがパスを出すタイミングや、ボールを奪いに行くポジショニング、ゴールを奪う嗅覚や危険察知能力といったことは、ボール扱いが上手くない選手でも実によく知っている。これは、イタリアのコーチがそういったことをよく教えていて、日本のコーチは教えていないという単純な理由ではないと思う。もう一つ、決定的に違うことはサッカーに取り組む姿勢や、ファイトする気持ちが全く違う。日本人は対人プレーで厳しさが無い。イタリア人は怖いくらい果敢に体をぶつけてくる。「競り合う」「やりあう」がとにかく激しいのだ。負けたくないという気迫がどうも日本人には欠けていると思う。

イタリアでは子供たちに入ってくるサッカーの情報が日本よりはるかに多い。サッカーの競技人口、テレビや新聞の扱い（例えばイタリアでもっとも有名なスポーツ新聞「ガゼッタデルスポルト」の紙面では全28ページ中なんと20ページがサッカーの記事）、日常においてヨーロッパはサッカーがあふれている。これも文化というならば、まさしく文化が

違うのだ。日本の環境がヨーロッパに近づき、素晴らしい技術とクレバーな戦術、そして日本人が得意としている規律と真面目さがあれば必ず世界の頂点に立てるような気がしてきた。20年前私は日本は絶対世界に勝てないと思っていた。4年前初めてイタリアへ中学生を連れて行ったときも、まだまだ追いつかないと感じた。しかし、今回訪問中に行われた日本代表対ポーランドではアウェーで撃破したではないか。日本は急激に、そして確実に進歩している。

攻撃の戦術理論（パオロの指導者講習会より）

全ての練習を紹介することはできないが、パオロ氏が行った指導者講習会から2人の攻撃理論を紹介したい。攻撃を教える事はむずかしい。選手の創造性や意外性が攻撃を作り出すことが多いので、理論では教えきれない部分がある。グループ戦術の最小単位の2人での攻撃を例に理論立てて講習を行ってくれた。

2人での攻撃の基本パターン

2人での攻撃の基本パターンは次の通り。

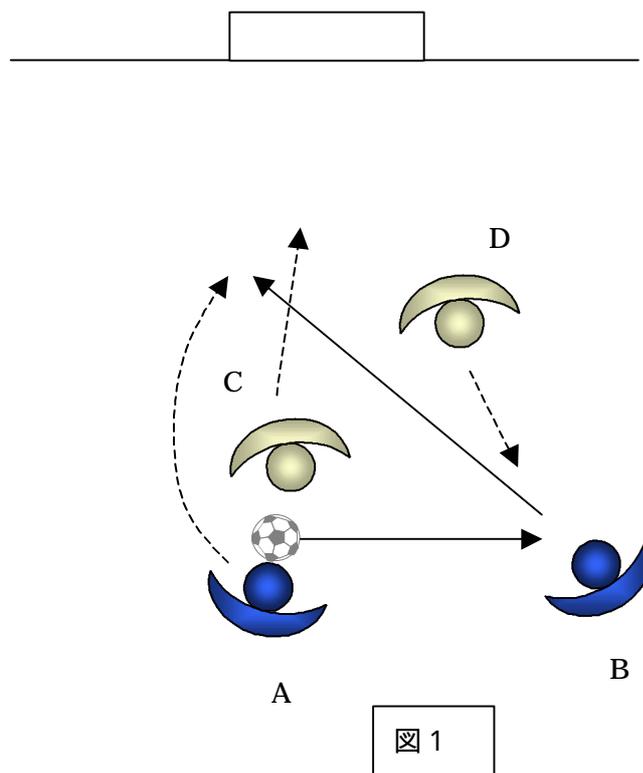
1. 三角パス
2. カットイン
3. 縦への動き
4. クロスオーバー
5. 個人の突破
6. ブロッコ
7. ベール

では、それぞれを解説していこう。

1. 三角パス（図1）

これは、壁パスと同じ。図1でAはBにパスを出しゴールの方へ動く。Bは動いた所へパスを出す。ペナルティエリア付近の比較的密集した所や守備がしっかり組織されている所を突破する時に有効。

守備は図のようにCが下がり、Dが前に入る動きで対応する。CがそのままBの方へ行くと、CとDの間をパスが通されやすい。Dはアプローチする時に飛び込まないように注意する。Bに抜かれてしまうと非常に危険である。



2. カットイン (図2)

ボールを持っていない選手 B がアのコースのように守備者 C と D の間を斜めに切れ込むように走りこむ。または、D の背後をイのコースのように斜めに切れ込むように走り、そこへパスを出す。

A が B の動きが見えること。守備者 C の背後にスペースがあるときに行うのが有効。

守備の方法として D は B の動きについていかななくてはならない。

カットインというとボールを持っている選手の動きをイメージしてしまいがちだが、ここではボールを持っていない選手の動きの事である。イタリア語ではアとイのそれぞれの動きに「名称」がついている。プレーに細かく名前がついていることは、サッカーをより深く分析していることになる。日本では、この動きはダイアゴナルランという名称だと思うが、アとイの区別はあまりつけられていないように思う。イタリア語ではこのプレーは「TAGLIO (カット、切断、刃などの意味) interno (内側) / esterno (外側)」という。つまり、サッカーを教える時に「TAGLIO interno! 」と言えば、図のアの動きをイメージできる。こういうこともサッカー文化成熟の違いかもしれない。

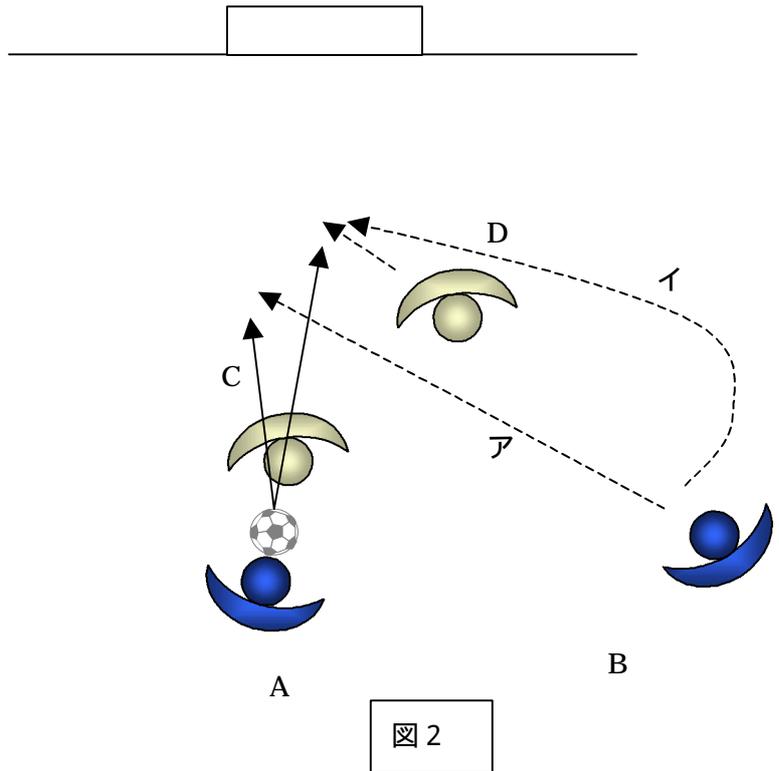


図2

3. 縦への動き (図3)

B は D の背後の縦へ走りこみ A はそこにパスを出す。D の背後にスペースがあるときと A と B がお互いよく見える状況のときに行うのが有効。守備の対処はそのまま B についていく方法と、前方に上がってオフサイドにする方法がある。もちろんオフサイドで対応する事は危険なやり方

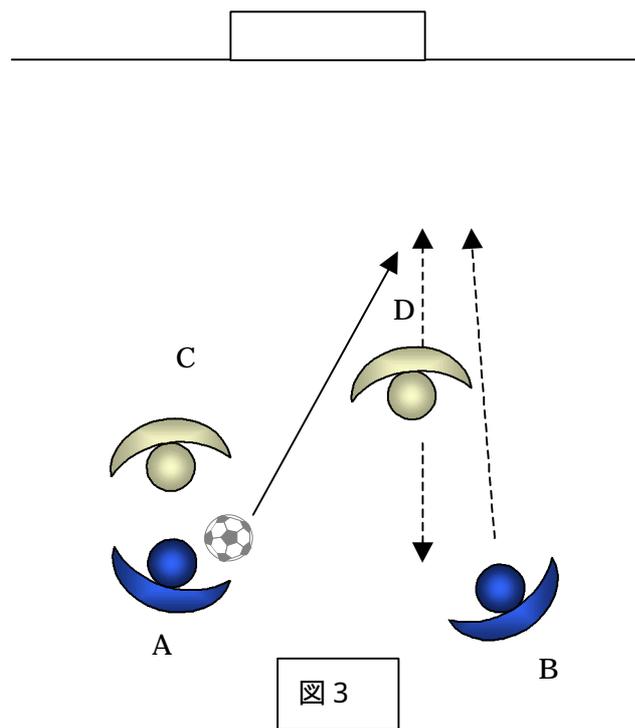
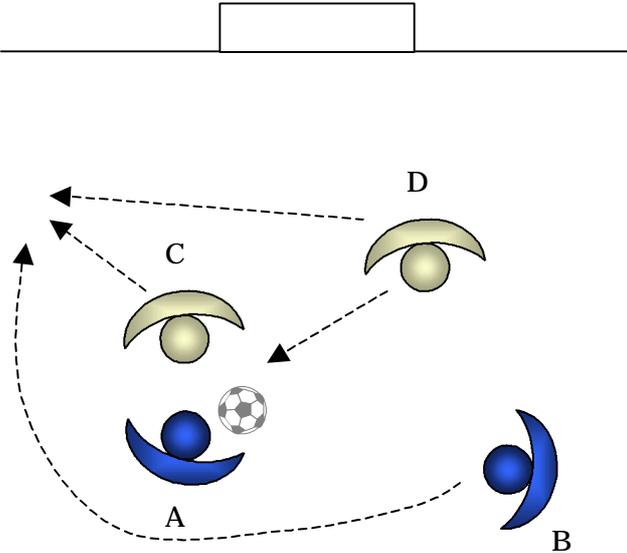
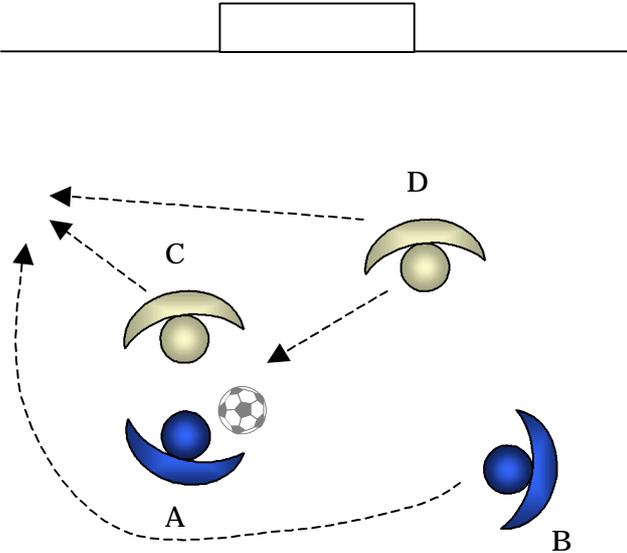


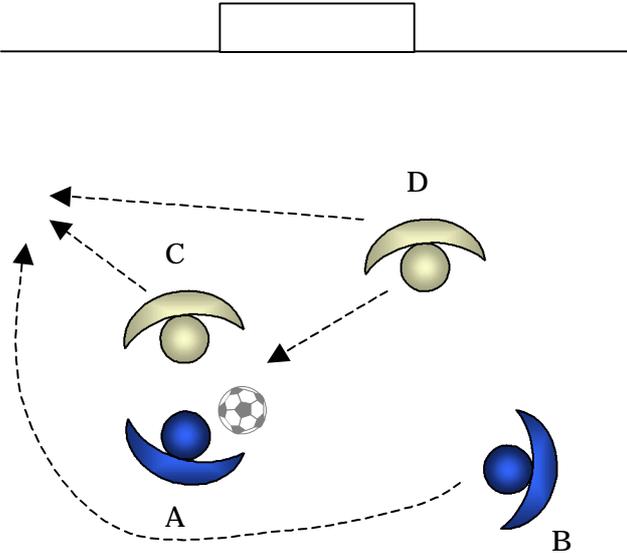
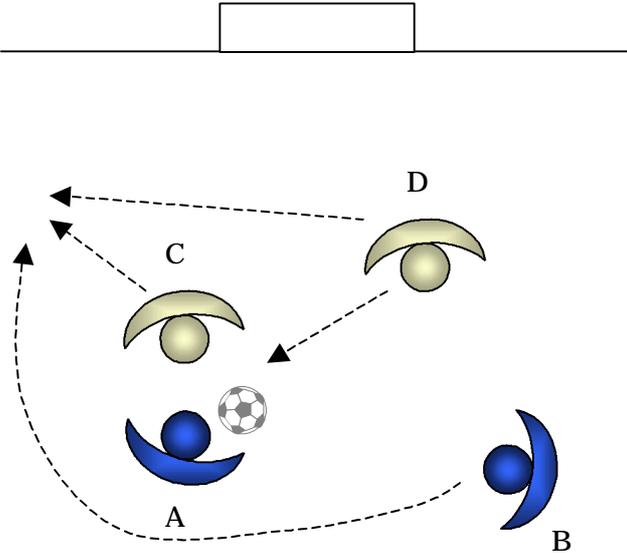
図3

だが、緊急避難としてこういうやり方もあることを知らなければならない。

4. クロスオーバー（図4）

BはAの背後を通過して前に出る。三角パス同様に守備が組織されている時やあまりスペースがないところを破るのに有効。横の動きが入るので、守備者を横の動きに誘いスペースを作ることができる。

守備の対応は、のようにDがBの動きに合わせて横に動きそのままつく方法とのように、Dは途中までBの動きに対応するが、Aに近づいた所でCに受け渡しをして、CがBの動きに対応するやり方がある。どちらが絶対に正しい

という事はないが、の方法は一瞬でもAのマークが外れる時があるため、その瞬間が非常に危険である。の方が無難。

5. 個人の突破（図5）

AはCを個人の突破で抜く。Aに突破力がある場合またはCが弱い時やCの背後にスペースがあるときに有効。

守備はCが抜かれたらDはすぐにカバーに入る。もちろんCはすぐにゴールに戻る。BがDの背後に入っていたら、Dは上がってオフサイドにすることも可能。ただし、これも緊急避難として知っておく必要がある。いずれにしてもこの状況で1人が抜かれると、守備側にとって状況は厳しい。

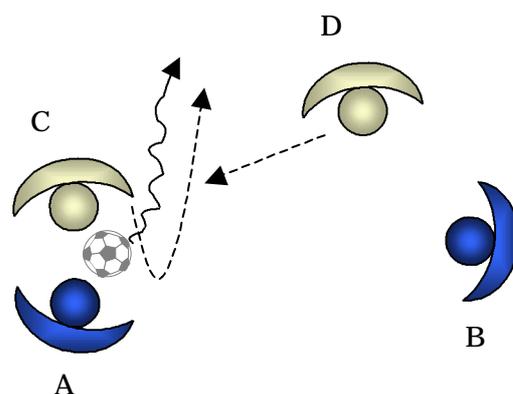


図5

6. ブロック (図6、7)

ボール保持者AはBの見方にドリブルをしながら近づく。(図-6)守備者CはAの動きに合わせてついてくるので、BはAと近づいた時にCの体をブロックする。(図-7)AはCのマークをはずす事ができる。

守備の組織が整っている時やマンマークが厳しい相手に有効。スペースがないところでの突破に有効。

7. ベール (図8、9)

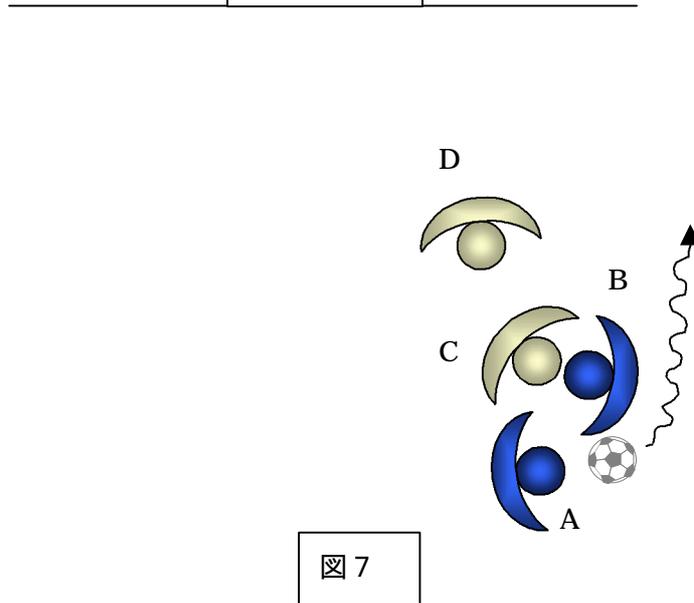
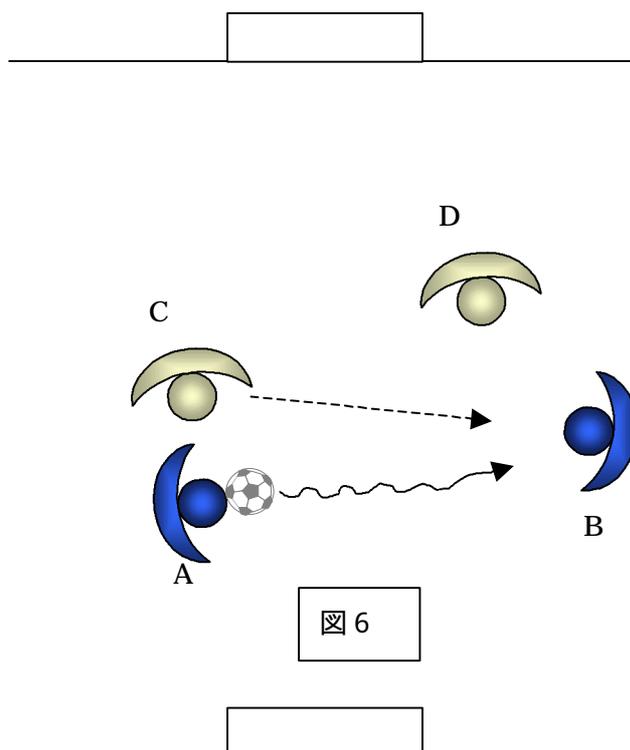
ブロックと同じ考え方。ボールを持っていないBはボール保持者Aに近づく。Bのマーク守備者DはBの動きに合わせてついてくる。(図-8)BとAが近づいた時にBはCの体をブロックする(図-9)AはCのマークをはずす事ができる。

ブロック同様、守備の組織が整っていてマンマークが厳しい相手に有効。

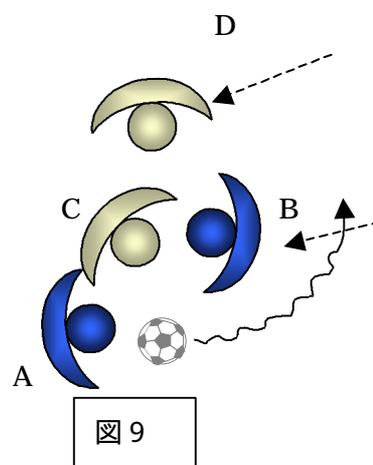
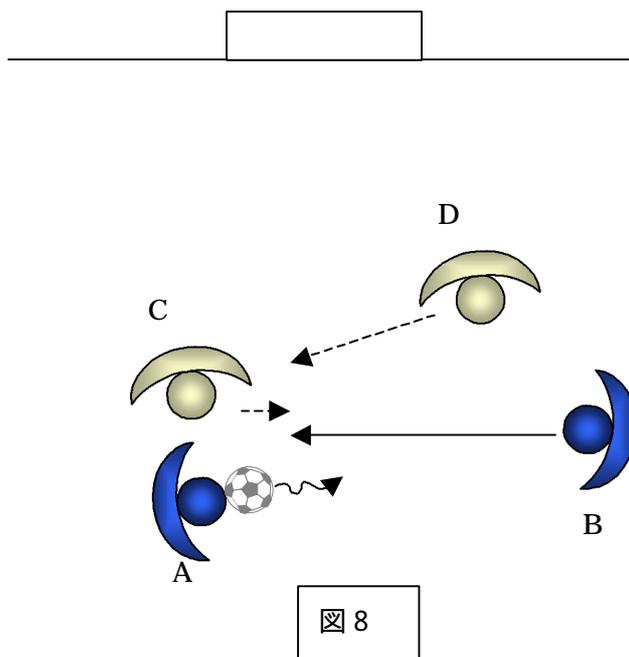
2人のグループで突破を考える時にこの7つのやり方をまず学ばなければならない。守備の状況に応じてどの突破の方法を選択するかは練習を繰り返して体で覚えなければならない。

だいたいACパルマでは10歳から

1対1の戦術内容がはじまり、2対1、1対2などへ発展していく。2対2の攻撃と守備はこのようなアイデアを教えて状況に応じてプレーできるようにしていく。さらに、3対2や2対3に発展していくが、3人の攻撃はこれらを応用した形となる。講義では3対3の戦術まで発展させた。3人の配置や状況によって突破の方法が整理されており、また守備の対処の仕方もそれぞれによって考え方がまとめられていた。練習ではあまりプレーを止めて細かくポジショニングを修正するわけではないが、コーチの練習の組み立てにはこのようにサッカーを分析能力を開発する為に目的がはっきりしている事を強く感じた。日本では



どうしても攻撃は選手のアイディアとか想像力に任せて指導がおろそかになりがちで、コーチは「試合で攻撃ができない」と嘆いているが、選手に基本的なイメージがなければなかなか試合で使えるようにはならない。そういった想像力の材料をコーチは与えなくてはならない。



日程表

	フレスカ 神戸 河村	フレスカ ユース 亀谷	フレスカ A 藤原	フレスカ B 中本	シーガル 萩久保	ウエストA 宗政・新谷	ウエスト B 来海	三井千葉 小林	習志野 星野
3月26日	エールフランス291便12:45開空発 パリ経由ミラノマルペンサ22:20着 オーストリア航空56便 11:25開空発 ウィーン経由ミラノマルペンサ18:55着							スカンジナビア航空	
3月27日	パヴィア国際サッカースクール Stuard グラウンド								
	0 - 4 Parma 87	0 - 8 Parma AR86	0 - 3 Certosa	2 - 0 Folgore	1 - 2 Salsomaggiore 87	4 - 3 Fidenza87	1 - 4 Fidenza88	1 - 5 Parma 86	0 - 4 parma87,88
3月28日	パヴィア国際サッカースクール Stuard グラウンド								
	1 - 0 JUVE Club	1 - 0 Il Castello	3 - 0 Montebello	3 - 2 Il Cervo	0 - 0 Audace	7 - 0 Ducale	2 - 0 Virtus	4 - 2 Traverset	7 - 2 Sanleo
3月29日	パヴィア国際サッカースクール Colledchio グラウンド					ジェノア大会 5 - 0 Quezzi 1 - 3 Molssanaboero	ジェノア大 会 0 - 4 Borgoratti 1 - 0 Molassana	トレーニ グ Colledchio グラウンド 3 - 0 RealvBag	ジェノア大会 2 - 1 Athletic Club 1 - 0 Bogliasso
	マラネッロ 大会 1 - 2 US Casapulla	1 - 2 Milan Club	パヴィア大会 0 - 0 Bressana	パヴィア大 会0 - 4 Binasco	0 - 1 Viadana				
3月30日	マラネッロ 大会 5 - 3 Ug Manduria	トレーニング Collecchio グラウンド							
	セリエA試合観戦 第29節 ミラノ-パヴィア 観戦 サンシーロスタジアム ミラン3 - 1パヴィア								
3月31日	マラネッロ 大会 1 - 2 Joso Identy	トレーニング Colledchio グラウンド							ジェノア大会 準決勝4 - 3 Athletic
	パヴィア観光								
4月1日	パヴィア国際サッカースクール Collecchio グラウンド								ジェノア大会 決勝2 - 0 Ligorna
	5 - 0 Crodiatei	2 - 1 Inter Club	3 - 0 RealvBag	1 - 0 Milan Club	2 - 0 Langhirono	1 - 0 Virtus	2 - 4 Realv Baganz	5 - 0 Il Cervo	
4月2日	パヴィア国際サッカースクール Collecchio グラウンド								
	7 - 2 Busseto	2 - 1 Busseto	2 - 1 Busseto	3 - 0 Sanleo	0 - 2 RealvBag	1 - 1 Milan Club	3 - 1 Crodiatei	7 - 0 Ducale	1 - 1 JUVE Club
4月3日	エールフランス1213便9:35 ミラノリナーデ空港発 パリ経由開空8:00着 オーストリア航空56便 8:05 ミラノマルペンサ空港発 ウィーン経由開空7:55着							スカンジナビア航空	

スタッフ

団長 高橋和幸 (FC フレスカ)

技術委員長 天野泰男 (FC フレスカ)

コーチ 宗政潤一郎、新谷哲章 (MUNE 広島 FC)、萩久保政信 (シーガルスポーツクラブ サッカー部)、小林 浩 (三井千葉 SC)、来海明彦 (タイケンススポーツクラブ北熊本)、星野隆之 (ウイングス SS 習志野)、亀谷 潤、河村 優、藤原孝雄、中本 朗 (FC フレスカ)

現地コーディネーターと通訳 小山浩太郎

通訳 竹口 陽、稲垣 愛子、垣内一之、中村美和

日本コーディネーター 太田浩之

